

あれから一度も宝川温泉を訪れていないので、今回は実に 45 年ぶりの訪問だ。

■混浴の大露天風呂

宝川温泉の汪仙閣に泊まる。宿は宝川という利根川の支流の川を挟んで露天風呂や建物が点在しており、川のせせらぎが山間に響いている。

紅葉の季節ということもあり日帰り入浴も含め、何やらとても繁盛している。残念ながら紅葉は見頃をやや過ぎて遅いようではあるが、それでも完全に散っている訳でもないので十分に楽しめる。むしろ少し散った方が風情を楽しめるという人もいる。



繁盛している理由は紅葉以外にもあって、この温泉は大きな混浴露天風呂が人気だからだ。混浴というと女性客は遠慮しがちではあるが、ここでは宿泊客には湯浴み着を貸してくれる。日帰り客もバスタオル OK ということで、あまり気にすることなく混浴が楽しめるので口コミで人気広がったのだろう。

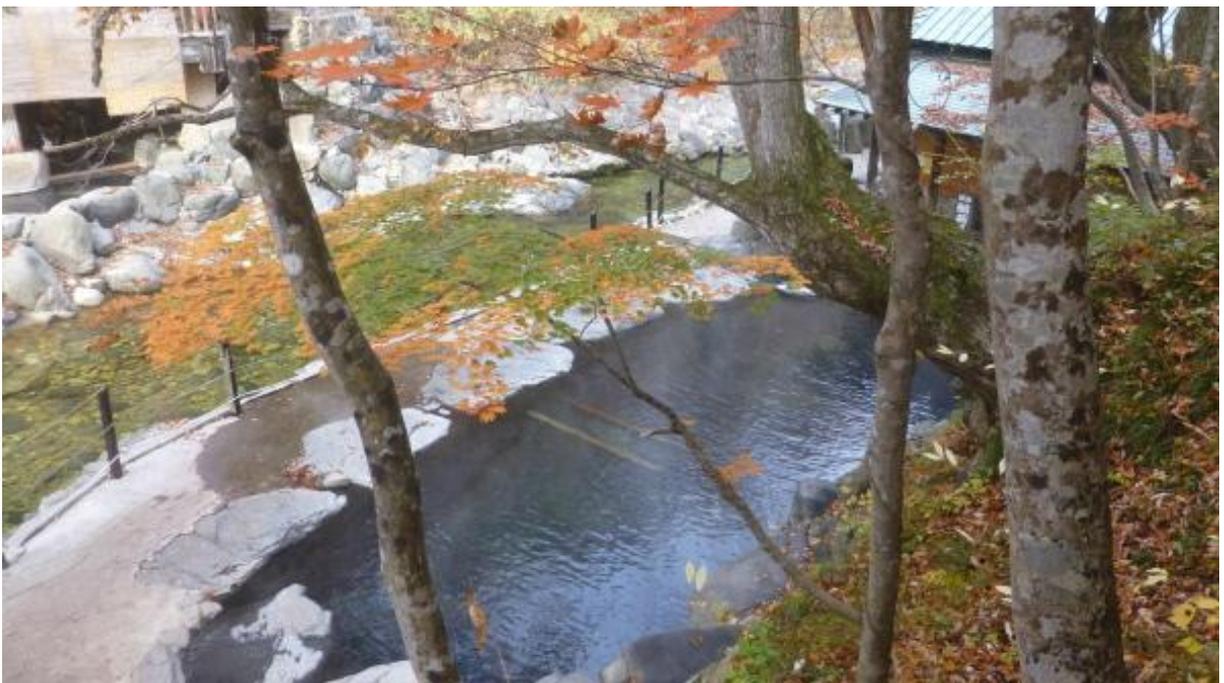
テニスコート程の大きさの混浴露天風呂が 3 つ、女性専用露天風呂が 1 つあるが、妻の話では女性専用露天は高い柵に囲まれてあまり眺望を楽しめないというから人気がない。妻もその様子を見てからこちらの混浴露天風呂にやってきた。

当然のように友人の奥方も一緒に 4 人で解放感溢れる混浴の大露天風呂に紅葉を楽しみながらの入浴となる。

紅葉を見ながらの解放感に酔いしれる入浴は時間を忘れさせてくれる。時間だけではなく悩みも仕事も日常をも忘れさせてくれる。



温度はやや温い。いや湯の出口付近の場所を選べば熱いところもあるが、長い時間入るには温めで景色の良い場所に陣取る。目には紅葉、耳には川のせせらぎ、温い温泉という抜群の環境で結局のところ私は2時間程この湯に浸かることになる。



温泉の評価をする通称「おひょい」と呼ぶ温泉評価委員会を私が主事しており、その評価項目でこの温泉について評価する。泉質4、風呂5、料理4、コスパ4、秘湯度4、サービス4、建物・部屋4で平均点は4.14になった。なかなかの高得点だ。



■外国人も楽しむ

湯浴み着を着ての混浴は日本女性だけでなく、外国人女性も多く入ってくる。

最近の温泉地では外国人というと中国人ばかりだが、ここは少し違う。中国人、韓国人も見かけるが、欧米系の白人そして東南アジア系の方が多く見かける。

宿の従業員に聞くと外国人の割合は通年で平均すると宿泊客全体の4割程度だという。しかし冬はタイ人が7割程にもなるという。タイは雪が降らないので雪見の露天風呂を楽しみに来るのだろうが、タイ国内でテレビCMをやっているというからその効果だろう。

それにしてもタイは東南アジアの後進国なのに何故だと思っている人もいるかもしれないが、そんなことを思う人はもはや国際情勢についていっていない。国連調査の世界幸福度ランキングで日本は54位、タイは46位にいる。このランキングは経済指標や心のゆとりなども加味されている。

旅行業界では外国からの旅行者をインバウンドと呼び、その人数は2017年で2869万人と過去最高を記録した。東京五輪が開催される2020年の目標値としては4000万人である。2007年が835万人なので最近の増加の凄まじい。

それに対して我々日本人が海外に行く旅行者数をアウトバウンドと呼んでおり、その人数は2017年で1790万人、2007年は1730万人だったので微増だ。

つまりここ10年間でインバウンドがアウトバウンドを追い抜いてその差が広がっており、今後とも更にその差が広がるということだ。それくらい外国人旅行者が多くなっている。

その要因の一つは日本の独自文化の温泉だろう。温泉それも露天風呂にみんなで浸かるという文化は日本独自のもの、そこに日本の四季が加わるのだからこれはもう間違いない。

湯船に浸かって「どちらからですか？」と声をかけるのは常とう句であるが、これからは英語やスペイン語で聞かないといけない。

■みなかみはダムの町

みなかみ町は温泉以外にダムの町としても有名だ。いや、有名にしようとしているのかもしれない。私たちは今回の旅の目的の一つにこのダム巡りをしようとしている。

日本は山と川の国土なのでダムが非常に多い。それは一体いくつあるのだろうか。

ダムといっても大小様々なので小さいものを入れると切りがないが、高さ 15m 以上のものをダムと定義しておよそ 3000 基ある。一番多いのは最も古典的でいわゆる盛土をして作ったものがアースダムと呼ばれ、次に多いのが重力式ダムと呼ばれるものでコンクリートを主要材料として使用してその自重で水圧に耐えるのが特徴である。この2つの形式のダムで日本のダムの 2/3 以上を占める。

みなかみ町の中心から約 10km 車を走らせて重力式の藤原ダムにたどり着く。堤高 95m で 1959 年完成というから結構古いが当時としては巨大な建造物だったのだろう。その大きさがゆえに 159 戸の家がダム湖の下に沈んでいる。これは都会のために田舎が犠牲になるという公共事業の先駆けになったもので補償交渉等もめたらしい。近代化とか都市化で都会が便利になるためにはそういう犠牲がついてまわるのだろう。昨今は都会に住む人間が様々なところで権利主張をすることが多いが、田舎のそういう犠牲の上に都会生活が成り立っていることを忘れてはいけない。



さらに上流に車を 16km 走らせて奈良俣ダムに到着する。このダムはロックフィルダムで 1991 年完成の堤高 158m の大きなダムである。日本人がイメージする反り立つ壁のようなダムの堤防ではなく、上流のダム湖に向かって下流の放流側に向かってもなだらかな傾斜の堤防になっており、表面は大きな岩を積んで満たしている。ロックフィルという名前そのものだ。

内部は中心部を粘土質で遮水するコア材があり、このコア材の両面に砂や砂利からなるフィルター材が積まれ、さらにその外側に大きな岩を敷き詰めて全体の強度を高めている。

私はここを訪れるのは2回目であるが、このロックフィルダムをとっても気に入っている。それは若い頃にエジプトを訪れた際にロックフィルダムの代表作であるアスワンハイダムを見てのことで、砂漠のダムとはこのようなものかと驚いた。

アスワンハイダムの堤防は高さ111m、全長は3.6kmもある。堰き止めてできた人造湖は長さ550kmもある。エジプトはナイルの賜物という言葉があるように度重なる氾濫で砂漠に水が流れ込み、結果として肥よくな土地になるのでエジプト文明が栄えた。しかし近年では氾濫を防ぐために巨大なダムをつくることになり、国家事業として完成させたので当時の大統領の名前をダム湖につけた。有名なナセル湖だ。

そのダムによってアブシンプル神殿が湖に沈むのでその神殿を切り刻んで移設し復元したという大工事でもあった。やはりダムには恩恵もあるが、犠牲は付き物だ。

それと同じロックフィルダムを日本で見るができることに前回来た時には感激していた。しかし調べたらこのようなロックフィルダムは日本に約300基型もあるという。日本のダムの約1/10もあるというから自分の無知にも驚く。世の中にはダムの魅力に取りつかれてダム巡りを専門にしている達人もいるというのにである。



更に山奥に約15km、時おりすれ違う車がモーターボートをけん引している。こんな山奥でモーターボートとは不思議な光景である。そして見えてきたのは八木沢ダムで、あのモーターボートの意味もようやく分かった。この八木沢ダムが堰き止めたダム湖は奥利根湖と呼ばれ広大な湖になっており、釣りやボート遊びをすることができる。モーターボートでもなければとても船を出す気になれない広さだ。群馬県にあるダム湖では最大で、日本でも有数の大きさだ。

この八木沢ダムは堤高 131m で 1967 年完成のアーチ式ダムで、独特なフォルムをしている。アーチ式ダムは技術的にも興味深い。堤防が弓なりの形でダム湖側に膨らんでいるので水圧を左右の陸地に逃がす構造になっている。だから技術的にはその弓の角度が難しい、しかしそれはつまり芸術的には美しいフォルムになる。

そんなアーチ式ダムは日本には約 50 基ある。山と山の間の狭い谷を堰き止めるのは向いている構造で日本の地形に合っている。そして技術的には難しいから如何にも日本人が好きになるダムだろう。映画「黒部の太陽」で有名な立山連峰の黒部ダムもアーチ式である。



■ダムカレーは名物？

奈良俣ダムの管理施設ではダムにまつわる展示の他に、軽食を食べさせてくれる食堂がある。そして私たちはその食堂に立ち寄る。目的はズバリ、名物？のダムカレーである。

ダムカレーはカレーライスダムに見立てたもので、白米で堤防を作ってダムの水にはカレーのルーを貯めている。日本全国で 140 種類以上のダムカレーが存在しており、各ダム近くでは名物になっているようだ。日本ダムカレー協会なるものまで組織されている。いろいろなダムカレーが各地の創意工夫で提供されている。ダムの堤防にウインナーソーセージが貫通するように刺さっており、それを抜くとカレーが流れ出るといふダムの放流を意識した構造になっているのもある。

店の中にダムカレーのポスターが貼ってある。みなかみ町にある代表的な 3 つのダムの形式のダムカレーが紹介されている。左から重力式、アーチ式、ロックフィルだ。

ここは奈良俣ダムの食堂なので当然ロックフィルのダムカレーが出てくる。ロックフィルダムは白米で堤防を作るのは適しているのだろう。

見栄えも良く、味もなかなか美味い。同伴の友人は大のカレー通ということでカレーには相当うるさいが、その彼が太鼓判を押している。

堤防を崩して食べるという行為が、特別な気持ちを誘い一味違う原因かもしれない。



■谷川岳を望む

翌日は天気も良いので、予定を変更して谷川岳を目指す。とはいっても登山をするのではなく天神平という標高 1977m の谷川岳を近くに望むスキー場にロープウェイで登るだけである。

このスキー場でも標高 1319m あるが、スキー場なので一本長いリフトに乗ると標高 1500m の小高い山の上に出ることができる。

私も谷川岳には 2002 年に家族で登ったが、寒くなる前ならばこのスキー場からならば約 3km、標高差 600m というので 2 時間半もあれば登ることができる。

本日は晴れているのでこの 1500m の場所からの眺めが最高に素晴らしい。谷川岳が大きく見えるのはもちろんのこと、朝日岳、武尊（ほたか）山、至仏山など 2000m 級の山々を見ることができる。もちろんもっと空気が澄んでいれば富士山も見えるのだが残念ながら本日はそこまでは見えない。

谷川岳の頂上は猫の頭のような独特な形をしており、耳がある。それぞれオキの耳（1977m）とトマの耳（1963m）と呼ばれている。その両耳を間近にみることもできるのも良い土産話になるだろう。



